

二つの「人間革命」論

—池田・ペッチェイ対談『21世紀への警鐘』を学ぶ—

勘 坂 純 市

1. はじめに
2. アウレリオ・ペッチェイの「人間革命」論
3. 池田大作の「人間革命」論
4. むすび

1. はじめに

池田大作とアウレリオ・ペッチェイは、1975年5月16日、パリにおいて、はじめて対談した。池田は、当時、創価学会会長。同年の初頭にニューヨークの国連本部を訪問してホフライトネル事務総長と会談、その後、1月26日に発足したSGI（創価学会インターナショナル）の会長となっている。一方のペッチェイは、1968年にローマ・クラブを設立。1972年に出版された同クラブの報告書である『成長の限界』は、世界に衝撃を与えていた。

両者を直接に結びつけたのはアーノルド・トインビーであった。池田とトインビーは、1972年と1973年の2度ロンドンで対談し、その内容の一部は『21世紀への対話』⁽¹⁾として出版されている。2度目の対談が終わった後、トインビーは数名の知人を池田に紹介する。その一人がペッチェイであった。またトインビーは、池田の小説『人間革命』第1巻の英訳に序文を寄せている。ペッチェイは、池田との第一回対談の際に、この『人間革命』の英訳を持参していたという。同書は、第2次大戦後の創価学会の歴史を記した小説であり、池田の代表作である。トインビーは序文で次のように述べている。

創価学会は、生活のあらゆる分野において人類の精神的価値の革命的变化が早急に必要であるという信念に奮い立っている。そして、その信者は、この世界的な精神革命が、創価学会の教義を信奉し、それに基づいて行動することによって達成できると信じているのである⁽²⁾。

⁽¹⁾ アーノルド・トインビー、池田大作『21世紀への対話』文芸春秋社、1975年；Arnold Toynbee and Daisaku Ikeda, *Choose Life*, Oxford Univ. Press: Oxford, 1976.

⁽²⁾ Arnold Toynbee, “forward”, in Daisaku Ikeda, *Human revolution*, Weatherhill: New York and Tokyo, 1972.

また、「人間革命」という思想は、ペッチェイにとっても、人類が苦境を脱するための鍵であった。ペッチェイは、池田と対談する1975年の初頭に「人間性革命 (humanistic revolution)」という論文を発表し次のように述べている。

人類の物質的な苦境は、無知、近視眼、利己心といった精神的な要因によって悪化させられている。人間精神のルネサンスがこうした要因を直ちに取り除くことによって、人類は、障害なく、真の問題とその根本的な原因に立ち向かい、成功を収めることができるかもしれないのである。また、さらに、他に解決法が見当たらないときに暴力に頼るといふ誘惑にまげず、社会が移行期の混乱を乗り切るのには、ヒューマニズムの出現を推進力にすることによってのみ可能である⁽³⁾。

その後、池田と対談した際、ペッチェイは、これまでは「人間性革命」という概念を用いてきたが、「更に深く追求するならば、究極は人間革命に帰着するように考えるようになった」と述べた⁽⁴⁾。実際に、ペッチェイはその後出版した*The Human Quality* (日本語訳『人類の使命』)の第7章を「人間革命 (The Human Revolution)」としている⁽⁵⁾。さらに、別の著書*100 pages pour l'avenir* (『未来のための100ページ』)の最後の項目も「人間革命」だった⁽⁶⁾。

こうした経緯を考えれば、池田とペッチェイの対談集『21世紀への警鐘』(英語版、*Before It Is Too Late* 「手遅れになる前に」)⁽⁷⁾で「人間革命」が大きなテーマとなったことは驚くことではない。1984年に出版され、ペッチェイの遺書となった両者の対談集の構成は、第1部「人間と自然」、第2部「人間と人間」、そして、第3部「人間革命」である⁽⁸⁾。

では、池田とペッチェイの「人間革命」の、共通点と相違点はなにか。本稿では、二人の人間革命論を比較しながら、池田とペッチェイの人類に対するメッセージを読み解いていきたい。

2. アウレリオ・ペッチェイの「人間革命」論

ペッチェイにとって人間革命とは「人類の苦境 (the predicament of mankind)」を脱する方途である。そして、それは人間のもつ莫大な潜在的な可能性の開発を意味した。

-
- (3) Aurelio Peccei, "The Humanistic Revolution," *Successo international edition*, XVII, 1, 1975, p. 162.
- (4) 『聖教新聞』1975年5月18日1面。また、池田大作、R. D. ホフライトネル『見つめあう西と東』第三文明社、2005年、20頁。
- (5) A. ペッチェイ『人類の使命』大来佐武郎監訳、ダイヤモンド社、1979年 (Aurelio Peccei, *The Human Quality*, Pergamon Press: Oxford, 1977)
- (6) A. ペッチェイ『未来のための100ページ』大来佐武郎監訳、読売新聞社、1981年 (Aurelio Peccei, *100 pages pour l'avenir*, Economica: Paris, 1981)
- (7) 池田大作・A. ペッチェイ『21世紀への警鐘』読売新聞社、1984年; A. Peccei and D. Ikeda, (Richard L. Gage ed.) *Before It Is Too Late*, Kodansha International LTD.: Tokyo, 1984.
- (8) 1975年5月のパリでの初会談のあと、池田とペッチェイは4回対談を重ねている(第2回1979年11月に東京にて、第3回1981年6月にフィレンツェにて、第4回1982年1月に東京にて、第5回1983年6月にパリにて)。その後、1984年3月にペッチェイは逝去。同年、10月に出版された日本語版の対談集『21世紀への継承』には、ペッチェイの遺稿「恒久平和への道」が収められている。その後、1991年に池田は、当時のローマ・クラブの会長であったホフライトネルと会談し2005年に対談集『見つめあう東と西』を出版。また、池田は1996年にローマ・クラブの名誉会員となっている。

ローマ・クラブを設立した際、ペッチェイらは、人類が直面する危機を「人間の生活のあらゆる面に深く及ぶ全面的で時代を画するような危機」と捉えて、それを「人類の苦境」と名づけた。この苦境をもたらす「それぞれの問題は他のそれぞれの問題と関連しており、一つの問題に対する見かけ上の解決策は他の問題を悪化させたり妨げとなることがある」。そこで求められるのは、こうした「地球的問題複合体 (global problematique)」をトータルに捉える視角である⁽⁹⁾。このような広い視野から問題を捉える重要性は、池田との対談でも強調されている。

いわば地球全域にわたる人間システム全体を考えなければならないのです。……一つ一つの問題や一群の関連性のある諸問題を、他の多くの諸問題と一緒に、より広範な文脈の中で検討しなければならないのです。…/…必要なことは、われわれが今日していることや怠っていること、そしてそれを行う方法などが、より遠い将来に対して——少なくとも予知しうる限りの遠い将来に対して——どのような影響や結果をもたらすかを、絶えず査定することなのです⁽¹⁰⁾。(傍点原文)

この「人類の苦境」をもたらす「地球的問題複合体」を明らかにしようとしたのが、1972年に D. L. メドウズらが著した『成長の限界 (The Limit of Growth)』である。ここでは、「世界人口、工業化、汚染、食糧生産、および資源の使用の現在の成長率が不変のまま続くならば、来るべき100年以内に地球上の成長は限界点に達するであろう。もっともおこる見込みの強い結末は人口と工業力のかかなり突然の、制御不能な減少であろう⁽¹¹⁾」と、人類に対して警告が発せられている。

では、この「人類の苦境」を脱する方途はどこにあるか。ペッチェイは、それを人間革命に求める。それは、池田との対談で述べられた以下の見解に端的に示されている。

現代という苦難の時代におけるこの人間精神のルネサンス (復興)こそ、私が「人間革命」と呼んでいるものなのです。／内側からの革命的再生という概念は、単なる夢想ではありません。それは生き延び、自滅を回避しようとする本源的欲求に応えるものなのです。と同時に、それはわれわれの世代が経験することのできる、一種の文化的進化を意味します。それは、現在の苦境から抜け出すうえで人類が頼らねばならない“真実の理想像”の領域に属するものです⁽¹²⁾。

このペッチェイの人間革命論を理解する一つの鍵は「文化的進化 (cultural evolution)」である。かつて地球上に存在した数多くの生物種は、さまざまな環境の変化に直面し、そのなかで絶滅するものもあれば、生き残るものもいた。絶滅と生き残りを分けた要因の一つは、変化に対応して「進化」を遂げることができたか否かである。いま人類も種の絶滅の危機という「苦境」にある。そこで人類が「生き延び、自滅を回避しようとする」ために「進化」を遂げることができ

(9) ペッチェイ『人類の使命』83-5頁。

(10) 池田・ペッチェイ『21世紀への警鐘』234-5頁; *Before It Is Too Late*, p. 113.

(11) Donella H. Meadows, Dennis L. Meadows, Jørgen Randers, and William W. Behrens III, *The Limit to Growth, A report for the Club of Rome's project on the predicament of mankind*, 1972. 大来佐武郎監訳『成長の限界』ダイヤモンド社, 1972年, 11頁。

(12) 池田・ペッチェイ『21世紀への警鐘』232頁; *Before It Is Too Late*, p. 112.

るのが問題となるだろう。しかし、ペッチェイが求めるのは、生物学的な進化ではない。「人類進化の次の段階は『自然』の時間のかかる過程を待ってなされることはできないのであって、人類自身によって意識的に遂行されなければならない」⁽¹³⁾。この人類が意図的に遂行する進化こそが「文化的進化」である。

このような人類の「文化的進化」、すなわち人間革命を遂行するには、人類が直面する危機を広く人びとに知らせる必要がある。「すなわち、ただ一つの希望は、人類の苦境についての理解を深めることにより、自己の世代を超えて人間の視野を拡大し、未来や人類生存のために今とらなければならぬ方策について、真剣な関心を抱かせることである」⁽¹⁴⁾。そこで、ローマ・クラブは、『成長の限界』のあとも人類の苦境を知らせる多くの書籍を出版した。こうした苦境を人びとが知るようになれば、危機を克服するための人間革命に道が開かれる。その背景には、人間の中には眠ったままになっている莫大な可能性が存在するというペッチェイの確信があった。

まだ眠ってはいるが各人のうちにあって活用することができる能力はじつに莫大であり、われわれはこれを最大の人的資源とすることができます。われわれは、これらの能力をこの変化した世界の新たな状況に合致するように鍛錬し、開発することによって——ただこの方法によってのみ——自然との関係も含めて、人類の現状に多少なりとも秩序と調和を回復し、安全に先へと進むことができます⁽¹⁵⁾。

人間には大きな「活用することができる能力」が眠っている。この能力を鍛錬し、開発する人間革命によってのみ、人類はその「苦境」から脱することができるのである。

では、こうしたペッチェイのいう人間革命論と比較した場合、池田の人間革命論はどのような特徴をもっているのか。次にこの点を考察したい。

3. 池田大作の「人間革命」論

(1) 「人間生命の可能性」

池田も、一人ひとりの人間革命がペッチェイのいう「人類の苦境」の克服につながること、また、人間生命に大きな潜在的な可能性があることを強調する。池田は、環境開発サミットへの提言⁽¹⁶⁾において、各人のうちにある莫大な能力の存在を指摘した先のペッチェイの発言を引用しながら、次のように述べている。

この万人が等しく備えていながら自覚されていない宝である「人間生命の可能性」を、自他ともに最大限に開拓し、「あらゆる生命とのつながり」への感性を磨いていく人間教育こそ、21世紀の教育に求められるべき要件であります。……／＼迂遠のようではあっても、人間に帰着し、人間生命の開拓と変革から出発する「人間革命」こそ「地球革命」を実現させゆく王道であると、私は確信しております。

⁽¹³⁾ ペッチェイ『人類の使命』136頁。

⁽¹⁴⁾ ペッチェイ『人類の使命』136頁。

⁽¹⁵⁾ 池田・ペッチェイ『21世紀への警鐘』270頁；*Before It Is Too Late*, p. 131.

⁽¹⁶⁾ 池田大作「地球革命への挑戦——持続可能な未来のための教育」『聖教新聞』2002年8月26日。

ここでいう「地球革命」は、ペッチェイのいう「地球的問題複合体」がもたらす「人類の苦境」を克服する“革命”を意味するであろう。その実現のための王道は、「人間生命の可能性」を最大限に開拓する「人間革命」である。

さらに池田は、この人間革命を支える哲学を日蓮仏法に求める。ペッチェイが、「私は、[人類が苦境を脱するために] この不可欠の進化を引き起こし、成就させるのは、強力にして革新的な人間主義による以外にないと主張しています」（傍点原文）と述べたことに対し、池田は、「博士のいわれる『強力にして革新的な人間主義』の要請に応えるものこそ、私は仏教の説く生命変革であることを、ますます確信いたします」と答えている⁽¹⁷⁾。

ペッチェイのいう「まだ眠ってはいるが各人のうちにあつて活用することができる能力」を仏教では、「仏性」と捉える。それは、「万人の生命の奥底に、宇宙的大我ともいうべき、広大にして力強い実体がある」と説かれている。「この仏性を開き顕わして、そのもっている力を現実の人生の行動に発揮していくこと」こそ人間革命に他ならない⁽¹⁸⁾。

（2）目的としての人間革命

しかし、池田のいう人間革命が、ペッチェイのいうそれと完全に重なるわけではない。まず、池田にとって、一人ひとりの人間革命は、それ自体が究極的な目的である。それは、人間革命を「人類の苦境」を脱するための方途と捉えていたペッチェイとは異なっていた。もちそん、先に述べたように、池田も一人ひとりの人間革命が、「人類の苦境」を脱することにつながることを強調する。しかし、池田は、その苦境を脱するために、人びとに人間革命の必要性を説いたのではない。池田は、あくまで、目の前の一人ひとりの幸福のために、その人の人間革命を訴えたのである。

この相違は、単なるレトリックの違いではない。この点を明らかにするために、次のような単純な問いを立ててみよう。——資源の枯渇、環境の破壊といった問題がなければ、人間革命は必要ではないのか？

これは決して議論のための議論ではない。実際に、ローマ・クラブの主張に対しては、それが警告する「資源の枯渇」「環境の破壊」が事態を深刻にえがき過ぎているという批判が表明され続けてきた。例えば、ロンボルグは『環境危機をあおってはいけない』で次のように主張している。

OPECに先立つこと一年、すさまじい人気と影響力を持った一冊の本が出た——『成長の限界』だ。システム分析とコンピュータシミュレーションという新しいコンセプトを使ったこの本は、ぼくたちの過剰消費や大惨事への道筋分析の1970年代における焦点となった。…／…『成長の限界』で得られたのはまさに破滅の日の予言だった。『成長の限界』では各種の資源とあわせて、石油も1992年以前に枯渇すると示してくれた。ご存じの通り、そんなことにはなっていない。⁽¹⁹⁾

⁽¹⁷⁾ 池田・ペッチェイ『21世紀への警鐘』260頁；*Before It Is Too Late*, p. 126.

⁽¹⁸⁾ 池田・ペッチェイ『21世紀への警鐘』261頁；*Before It Is Too Late*, p. 127.

⁽¹⁹⁾ ビョルン・ロンボルグ『環境危機をあおってはいけない：地球環境のホントの実態』山形浩生訳、文藝春秋社、205-6頁。

もちろん池田はこうした批判に与するものではないだろう。それは、先に示した「環境開発サミット」への提言、ヘンダーソン女史との対談⁽²⁰⁾をはじめとした環境問題に対する池田の一貫した積極的な行動からも明らかである。

しかしあえて、資源の枯渇、環境の破壊といった問題がなければ人間革命は必要ではないのか、と問われれば、池田は、それでも人間革命は必要であると答えるに違いない。ペッチェイとの対談で池田は次のように述べている。

物質的な豊かさ自体、一方では環境の破壊と汚染という弊害を生じ、他方では資源の枯渇という行き詰まりを控えていることは周知のとおりです。この物質的な諸問題については、人類は、あるいは、科学と技術の力によって解決できるかもしれません。エネルギー資源は太陽エネルギーの利用等により、材料資源は循環利用によって、無限性を確保できるようになることも考えられます。しかし、たとえそうであっても、手放して未来に理想像を描くことは不可能となっているのです。／ここで求められるのは、人間自身の変革です⁽²¹⁾。

池田は、資源の枯渇、環境の破壊といった「物質的な諸問題については、人類は、あるいは、科学と技術の力によって解決できるかもしれません」としたうえで、「たとえそうであっても、手放して未来に理想像を描くことは不可能となっている」と指摘する。その中で、かれは「人間自身の変革」、すなわち人間革命の必要性を訴えた。

これに対し、ペッチェイにとっては、資源の枯渇、環境の破壊といった問題がなければ人間革命は必要ではないのか、という問いは、ナンセンスであるに違いない。なぜなら資源の枯渇、環境の破壊がもたらす「人類の苦境」が、彼の主張・行動の前提になっているからである。こうした問題の存在は、彼にとっては、疑う余地はない。先に述べたように、ペッチェイにとって、人間革命はこの苦境を脱する方途であった。そうであるのなら、資源の枯渇、環境の破壊がないのなら、人間革命を論ずる必要すらないであろう。

これは何を意味するのか。もちろん、それは、単に池田の扱っている問題がペッチェイの関心より広いということではない。ペッチェイの関心も、資源の枯渇、環境の破壊といった「物質的な諸問題」に限られているわけではないからだ。池田との対談でも、その話題は、世界平和、民主主義の問題に及んでいる。まさに諸問題は相互に複雑に関連しあった「地球的問題複合体」として存在している。両者の視線は、ともに人類全体が直面する広範な課題に向いている。

むしろ池田の主張を特徴付けるのは、人間革命を、「人類の苦境」を脱するためであるにせよ、生命の衰退よる広範な社会問題を解決するためであるにせよ、何かの目的のために必要な手段・方途として捉えないところにある。池田にとって、一人ひとりの人間革命は、あくまで最終的な“目標”であって、決して何かのための“手段”ではない。その意味で、「資源の枯渇、環境の破壊といった問題がなければ、人間革命は必要ではないのか？」という先の問いに対しては、「資源

⁽²⁰⁾ 池田大作、ヘイゼル・ヘンダーソン『地球対談輝く女性の世紀へ』主婦の友社、2003年。

⁽²¹⁾ 池田・ペッチェイ『21世紀への警鐘』215頁；*Before It Is Too Late*, p. 104.

の枯渇、環境の破壊といった問題」がどのような問題に変わったとしても、池田は、一人ひとりが自身の人間革命を追求していくことこそが大切であると答えるに違いない。彼にとって、人間革命は何らかの社会目的のためにするのでないからだ。一人ひとりの人間革命はそれ自体が目標である。ゆえに、人間革命の社会的目的が何であるかが問題なのではない。池田が、何らかの社会的目的のために人びとに人間革命を促すということはない。

目的とすべきは、あくまで一人ひとりの幸福である。池田は、この姿勢を終始変えていない。例えば、2000年に発表した教育提言『教育のための社会』を目指して⁽²²⁾において、彼が主張したのは、「社会のための教育」ではなく「教育のための社会」の必要性であった。そこで池田は、ロバート・サーマン（コロンビア大学宗教学部長）の『教育における社会の役割』を問うべきです。なぜなら、教育が、人間生命の目的であると、私は見ているからです」という発言を、「卓見である」として引用している。池田はここに、「自由な主体である人格は、他の手段とされてはならず、それ自身が目的であるとしたカントの人格哲学」に通じる視角をみる。“人間を他の目的の手段としてはならない”は、まさに、池田自身の一貫した哲学であった。

(3) 「自らの宿命と戦っている人こそ人間として尊い」

池田のこの姿勢は、ペッチェイとの対談の中で、「真実の人間尊重は何か」について語りあう箇所でも明確に示されている。少し長くなるが、両者の発言を、順を追って見てみよう。池田は、まず、人間尊重の名のもとで「放縦な欲望や野心の追及が正当化」されることを批判した後、次のように指摘した。

私は、本当の人間尊重とは、このように、各人が“自分の宿命と戦う自由”を自他ともに尊重することであり、現在受けている条件がいかなるものであれ、自らの宿命と戦っている人こそ人間として尊いとする考え方が、確立されるべきであろうと思います⁽²³⁾。

人間は、永遠の過去から、無数の生と死を繰り返してきている。その中での自身の行為の結果として生命の中に蓄えられているのが「宿命」（業＝カルマ）である。人は誰でも、「現在の人生の中だけでは因果関係を解明できない、さまざまな特質」を持っている。そうした、現在の「果」が生じる「因」となっているのが、過去世からの「宿命」である。しかし、日蓮仏法は、現在の状態を、「宿命」としてあきらめ受け入れることを説いていない。むしろ、こうした宿命を“転換”していく力が、各人の生命の中にあることを教えている。池田は、「広い意味でいえば、人間が、

⁽²²⁾ 池田大作『教育のための社会』を目指して』『聖教新聞』2000年9月29日。

⁽²³⁾ 池田・ペッチェイ『21世紀への警鐘』157頁；*Before It Is Too Late*, p. 76. この箇所の英訳は、残念ながら、原文の含意が十分に伝わっていないと思われる。ちなみに、「各人が“自分の宿命と戦う自由”を……尊重する」、「現在受けている条件がいかなるものであれ、自らの宿命と戦っている人こそ人間として尊い」に対応すると思われる英文は、それぞれ、“Everyone should be free to deal with inherited destiny”, “Karmic relations aside, the dignity and liberty of each human being deserve full respect”である。

自らのもっている条件と戦い、善い業の因を作る方向に、自らの生き方を変えていくのが“人間革命”といえます」と述べている。先の引用文の、“自分の宿命と戦う自由”とは、まさにこの「宿命転換」の戦い、すなわち人間革命の戦いである⁽²⁴⁾。

この池田の発言に対して、ペッチェイは次のように答えた。

しかし、他人の自由を尊重するという消極的な行為だけでは、まだ十分ではありません。……われわれは、たんに他者の自由を尊重するだけでなく、あらゆる国の人々が自由を行使できる立場になるよう、力を尽くさなければなりません。それには、この世界から、集団的な無知、貧困、不健康、その他の社会悪を払拭し、同時に中央集権化された権力がいまや過去のどの時代よりも容易に加えうる政治的自由規制を取り除くために、総力をあげ、一致協力してこれに当たらなければなりません⁽²⁵⁾。

単に人びとを自由にさせるだけではなく、自由を行使できるようにしなくてはならない。例えば、十分な教育を受けられない人、貧困の中にある人、健康を害している人は、「自由」な行動が許されていても、人生の選択肢は極めて限られてしまっている。いま必要なのは、こうした人びとの具体的な選択肢を拡大すること、その意味で、「自由を行使する立場になる」ように、社会の教育、経済、衛生環境を整えていくことである。こうした考え方は、人間の「自由」を、彼／彼女が達成しうる機能（functionings）の「集合」と捉えたアマルティア・センの議論⁽²⁶⁾にも通じており、きわめて説得的である。

池田も、「人間が社会的になすべきこととして挙げれば、博士のおっしゃるとおりです」と答えた。しかし、その上で、あえて池田は次のように続ける。

私が申し上げたいのは、そうした行動・実践が目的とすべきものは何か——それは各人の宿命と戦う内面的自由を尊重し、真の自立をもたらすことであり、そこに目的が置かれなければならないということです。／それを見失うと、社会の改革という名のもとに、個人の自由と尊厳性が奪われる結果に陥る恐れがあるからです⁽²⁷⁾。

どんなに「正しい」目的であっても、そのために人間を手段とすることは、絶対に許さない。ここでも池田は、この姿勢を崩していない。目的とすべきは、あくまで一人ひとりの幸福であり、宿命転換であり、人間革命である。

「各人の宿命と戦う内面的自由」。このことを論ずるとき、池田の念頭にあったのは、貧乏苦、病苦といった宿命と格闘している具体的な人びとの姿であったに違いない。池田が会長を務めた創価学会は、しばしば「貧乏人と病人の集まり」であるといわれてきた。もちろんこれは蔑称である。しかし、池田は、いわば社会の最底辺にあった「貧乏人と病人」が、それぞれの人生を拓いて行った創価学会の歴史を誇りとする。まさに、「現在受けている条件がいかなるものであれ、

(24) 池田・ペッチェイ『21世紀への警鐘』131, 155頁; *Before It Is Too Late*, pp. 64, 76.

(25) 池田・ペッチェイ『21世紀への警鐘』158頁; *Before It Is Too Late*, p. 77.

(26) アマルティア・セン『福祉の経済学』鈴木興太郎訳、岩波書店、1988年、25-6頁。

(27) 池田・ペッチェイ『21世紀への警鐘』158頁; *Before It Is Too Late*, p. 77.

自らの宿命と戦っている人こそ人間として尊い」のだ。池田は、その行動の中で、縁をした一人ひとりに、自らの生命の中にある無限の可能性を示し、希望を与え続けてきた。池田のいう人間革命の具体像は、こうした人びとが自身の宿命に負けずに人生を拓いて行った“宿命転換”の中にこそある。

社会学者である玉野和志は、創価学会員である「中高年の男性」の証言として次の言葉を紹介している。

昔よくいったように、創価学会は病人と貧乏人ばかりの集まりだったわけで、どん底を味わった人が先輩の説いてくれる仏法の力でそこから這い上がってきたところがあるわけです。だから、そういう体験のある人でないとだめなところがあるんですね⁽²⁸⁾。

「先輩の説いてくれる仏法の力」とは、自身の生命に「仏性」という無限の可能性があるというメッセージである。それは、一人ひとりの人生に具体的な希望の光を与えてきた。ペッチェイのいう「まだ眠ってはいるが各人のうちにあって活用することができる能力」、また、池田のいう「万人が等しく備えていながら自覚されていない宝である『人間生命の可能性』」が自分にもあるという確信は、一人ひとりが「どん底」の苦境のなかで自分の人生を切り拓くための具体的な力となったのである。

玉野は、創価学会を「幸せにするシステム」と捉えている。それは、「かつて『病人と貧乏人ばかり』といわれた極めて困難な状況にある（『どん底を味わった』）人々が、その困難な状況にたいして積極的に立ち向かっていくことを組織ぐるみで応援するようなシステムとして作動してきたのである⁽²⁹⁾」。玉野も指摘するように、こうした活動に対しては、「実利主義」「現世利益主義」という批判が寄せられてきた。しかし、こうした批判は、むしろ、創価学会が現実の世の中での一人ひとりの具体的な「幸せ」を徹底して目的としてきたことを示しているともいえるのではないか。

もちろん、自身の宿命転換、人間革命の戦いにあって求められるのは、各人の幸福の追求だけではない。日蓮仏法の説く実践は、他人のために行動する「菩薩道」である。それは、自分が友好を結んだ一人ひとりに、その人がもつ可能性を示し、ともに励ましあいながら、宿命転換、人間革命を進めるネットワークを広げていく実践である。玉野がいうとおり、そこには「困難な状況にたいして積極的に立ち向かっていくことを組織ぐるみで応援する」人びとがいた。

一方で、『人間革命』英語版の序文でトインビーが指摘したように、創価学会員は、「人類の精神的価値の革命的变化」、すなわち“全人類の人間革命”が必要であるという信念をもっている。しかし、同時に彼らが“祈る”のは、自分が縁をした人びとの具体的な「幸せ」である。そうした、そうした一人ひとりを大切にする実践なしに「全人類の人間革命」など決してないことは、

⁽²⁸⁾ 玉野和志『東京のローカル・コミュニティ：ある町物語1900—80』東京大学出版会、2005年、231頁。

⁽²⁹⁾ 玉野『ローカル・コミュニティ』242頁。

何よりも、池田が身をもって示したことであった⁽³⁰⁾。

4. むすび

池田は、あくまで一人ひとりの人間革命から出発し、それを何かの手段とは決してしない。この点で、池田の姿勢は、「人類の苦境」を脱出する方途として人間革命を追求したペッチェイとは異なっている。先に指摘したように、ローマ・クラブは、出版などによって人類の苦境を人々に伝える活動に重きを置いた。そうすることにより、多くの人の自覚を促し、「文化的進化」を遂げることを目指した。これに対し、池田は、一人ひとりの人間革命をあくまで目的とする運動を実践してきた。先の「教育のための社会」に即して言えば、「社会のための人間革命ではなく」、「一人の人間革命のための社会」を目指してきたといえよう。そうした社会では、「現在受けている条件がいかなるものであれ、自らの宿命と戦っている人こそ人間として尊いとする考え方」が確立していなくてはならないだろう。

こうした一人ひとりの人間革命の広がり、やがて社会全体の変革につながっていく。さらにいえば、一人ひとりの宿命転換する戦いをあくまで目的とすることによってしか、真に社会を転換していくことはできない。その意味で、ある社会的な目的を設定し、そのために、また、それに合わせて人間を「革命」するような発想は、池田の人間革命論の対極にある。こうした池田の思想は、彼が、小説『人間革命』の「主題」として掲げた「一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする」⁽³¹⁾ という文章の一つの意味を教えてくれる。あくまで、「一人の人間における偉大な人間革命」が出发点である。そのひろがりの中で、やがて「全人類の宿命の転換」が可能になる。「全人類の宿命の転換」のために人びとの人間革命が計画されているわけではない。

池田は、ペッチェイとはじめての会談で、「人間革命には、どれくらいの時間がかかるのか」という問いに対し次のように答えた。

一個人の人間革命は、一応、10年がメドになるだろうが、より多くの人々の人間革命には、かなりの時間を必要とするだろう。しかし、行動せずして種をまかずして前進はない⁽³²⁾

一人の人間革命は10年が目途になるという発言は、多くの人びとの宿命転換を励まし続けてきた池田の発言であるだけに強烈なリアリティがある。その人間革命のネットワークを一人ひとり広げていく。その実践に「かなりの時間を必要とする」ことは、池田も強く自覚していた。しかし、「行動せずして種をまかずして前進はない」と、池田はこの地道な作業を30年以上たった今日でも続けている。どこまでも一人ひとりの幸福、人間革命のために行動し続ける。それは彼が、そ

⁽³⁰⁾ 池田の“一人ひとりを大切にする”「人間主義」の哲学については、勘坂純市「人間主義を学ぶ：池田・ゴルバチョフ対談『20世紀の精神の教訓』から」『創価教育研究』第4号、2005年を参照。

⁽³¹⁾ 池田大作『人間革命』第1巻、聖教新聞社

⁽³²⁾ 『聖教新聞』1975年5月18日1面。池田大作、R. D. ホフライトネル『見つめあう西と東——人間革命と地球革命』第三文明社、2005年、21頁。

うした実践のなかにしか、ペッチェイの遺志を継ぎ「全人類の宿命の転換を可能にする」道はないと考えているからに違いない。